

編集室

* 本号の特集「暗号世代交代と社会的インパクト」は、電子情報通信技術が現代社会のインフラとして定着しているがゆえに、その「危たい化」が深刻であり、対応が進んでいることを紹介した。情報ネットワークでは国境という壁はないか若しくは低いため、世界のどこかで何かがあれば、それは直ちに我が身に及ぶ影響にもなり得る。言うまでもなく、携帯電話やICカードなど、一人1台以上保有する機器にも暗号技術は使われており、危たい化が危機を招くほどに進行する前に、暗号技術の円滑な世代交代が進むことを期待したい。

* 特集掲載号では、表紙デザインが特集テーマに応じて変更される。本号のデザイン検討にあたり、デザイナーの内田華代様に伝えてもらったのは、①皆が安心だと思っている技術の安全の程度が、徐々に新たな技術革新や現状の技術の改善によって低下しつつあること、②危なくなっていることは何となく分かっているのだけれど「皆で渡れば怖くない」状態（「多分うちは大丈夫」という妙な安心感を持つとしている）、の2点であった。本稿を書いている時点では表紙が確定していないので、その意図が読者たる会員諸氏に伝わるものとなったかどうかはまだ分からない。安心・安全な生活を支えるICTの基礎がその裏（下?）でぐらついている、という印象を与えられたら幸いである。なお、危たい化はあらゆる技術において、緩急あるが常に進行する。読者御専門の分野でどうなっているか、社会への影響はどうかを考える機会にも本特集がなればと願う。

* 本特集は担当したWG・A全員のうち、暗号系を専門とする須賀委員（前WG・A副主査）に特にお世話になった。須賀委員による企画詳細化などが本特集を魅力あるものに昇華させたといっても過言ではなからう。ここに謝意を表する次第である。

* また、本特集企画は編集特別幹事並びにWG・A主査である自分の会誌編集業務の仕事納めとなった。2年間にわたって編集企画に御協力頂いたWG・A所属の編集委員の方々並びに事務局の方々にこの場にて御礼申し上げる。

（前編集特別幹事 牧野光則）

* 今年の6月から編集特別幹事を担当させて頂いている。学会の編集委員会のメンバーの多くが企業や大学からのボランティアである。世間一般的なボランティアとは意味合いが異なるところもあるが、会誌毎月号に、ボランティアとしてこれだけ多くの方がこれまでも脈々と時間と労力を提供してきていることに感心させられる。

* 編集特別幹事を担当させて頂いている間は少しでも会誌の魅力向上に貢献したい。会誌の記事の多くが編集委員会のメンバーからの自発的な提案からスタートする。このため、ここ数か月の活動からではあるが、編集委員会メンバーの提案の質が学会誌の魅力に直結すると強く感じている。では質の高い提案はどのように生み出されるかとなると、やはりメンバーのモチベーションの高さが大きな要因に思える。

* 私も含め編集委員会メンバーのモチベーションを高く維持するにはどうすればいいか。ネット検索した情報等を参考にすると、やはり「やりがい」を持って取り組めるかがポイントに思える。果たしてメンバーの多くが「やりがい」を持って取り組んでいるだろうか。メンバーとも意見交換しつつ、より良い編集環境づくりをしていきたい。

* 1,000年に1度ともいわれる東日本大震災が発生したのは3月11日。6月から月に1、2度は学会誌の編集で機械振興会館に足を運ぶが、東京タワーの先端の曲がりを見ると「あのとき」を思い出す。

* この夏、電力使用制限を受け、企業等では、週休日の平日設定、オフィス勤務時間のシフト、冷房設定温度のアップ、天井照明灯の間引き、エレベータの使用制限等々、実に様々な施策が実行された。これら施策は、「電力の無駄遣いをなくす施策」と、「電力使用制限のためにやむなく取り組んだ施策」に大別できるのではないだろうか。週休日の平日設定などはやむなく取り組んだ施策の一つであろう。社会全体が足並みをそろえたわけではないため、休日保育等、社会の歯車がかみ合わないところで課題を残したように思える。

* この冬は電力使用制限の発動はない方向と耳にしたが、電力供給事情に関わらず、「電力の無駄遣いをなくす施策」については今回を機会に継続して取り組むべきであろう。震災から得た一つの教訓である。

（編集特別幹事 源田浩一）